みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

The Culture of Drinking Tea during the Wei Jin Nanbei Dynasties

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 剣平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004040

国立民族学博物館研究報告27(2): 283-314 (2002)

魏晋南北朝における喫茶の文化

関　　剣　平*

The Culture of Drinking Tea during the Wei-Jin-Nanbei Dynasties

Guan Jinping

中国茶史上，陸羽の『茶経』があまりにも重要な文献であるため，宋代以降の茶史は唐代の陸羽をもって茶の始源として叙述する傾向が強く，その前代の魏晋南北朝時代への注目が少なかった。しかし，『茶経』が説くように魏晋南北朝時代は喫茶風習の成立期として非常に重要である。そこで同時代の史料を精査し，「風流」と「倹」の思想を軸に喫茶文化の動向を考え，さらに同時代の各社会階層における喫茶風習の受容の状況を明らかにした。あわせて『茶経』の記事を再検討し，史料批判を行った。

For the history of tea from the Song Dynasty to the Tang Dynasty of Lu Yu, there are few documents as important as Lu Yu's "The Tea Sutra". However, attempts to describe the history of tea from its origins fail to take account of the Wei-Jin-Nanbei Dynasties which were prior to the Tang Dynasty in which Lu Yu wrote "The Tea Sutra". "The Tea Sutra" itself says that the Wei-Jin-Nanbei Dynasties had an extreme importance in relation to the establishment of the habit of drinking tea. With a close investigation of the historical documents of that same period, I observe the trends surrounding the elegant and frugal thought in the culture of drinking tea, and afterwards I make clear the circumstances of the acceptance of tea drinking in the various social strata. Putting together these articles and rediscussing them, I conduct a criticism of these historical documents.

* 南開大学中国社会史研究センター，国立民族学博物館外来研究員

Key Words : The Wei-Jin-Nanbei Dynasties, tea drinking, elegance, social strata, frugality
キーワード : 魏晋南北朝，喫茶，風流，階層，倹

1　序論
1.1　喫茶文化史における魏晋南北朝期の評価
1.2　従来の研究成果
2　魏晋の風流と喫茶
2.1　魏晋の風流
2.2　喫茶の風流
3　茶の精神──倹
3.1　茶と茶宴の倹約
3.2　茶の価格
4　宮廷・官僚の喫茶
4.1　宮廷の喫茶と御用茶園の成立
4.2　最高の飲料とされる茶
4.3　喫茶史料に関する考察
4.4　北朝の喫茶
5　道士・僧侶・庶民の喫茶
5.1　道士・僧侶の喫茶
5.2　商品化される茶
5.3　供え物と喫茶
6　結論

1　序　　論

魏晋南北朝時代は中国における喫茶風習の成立期である。しかし,陸羽の『茶経』があまりにも重要な文献であるため，宋代以降の茶史は唐代の陸羽をもって茶の始源として叙述する傾向が強く，その前代の魏晋南北朝時代への注目は少なかった。本論は，これまでの先行研究を辿りながら，同時代の史料を精査し，「風流」と「倹」の思想を軸に喫茶文化の展開をうかがい，さらに同時代の各社会階層における喫茶風習の受容の状況を明らかにすることが求められる。『茶経』が偉大な文献であるため，従来の研究がその史料批判にまで及ばなかった面もある。微細な点ではあるが，『茶経』の記事を再検討し，史料批判を行うことも一つの目的である。

1.1　喫茶文化史における魏晋南北朝期の評価

魏晋南北朝は中国において喫茶の成立期であると考えられる。陸羽は彼以前の茶史について，次のように総括している。

> 茶が飲みはじめられたのは，神農氏（三皇の一人，また製薬・農耕の神として奉じられる）に発し，魯の周公（名は旦，周の文王の子である）で有名になった。斉には晏嬰（春秋時代の斉国の大臣）があり，漢には揚雄・司馬相如（二人とも漢代の著名な文学者，）があり，呉には韋曜があり，晋には劉琨・張載・遠祖納・謝安・左思の徒があって，みな茶を飲むようになった。そしてときと共に広まり，世俗に浸みわたり，国朝（唐）に盛んになって，両都（長安と洛陽）や，荊州（現在の湖北省松滋から石首の間の長江流域，北部は荊門・当陽を含む地域にあたる）・兪州（現在の重慶市と四川省巴県・江北・江津・璧山にあたる）の地方では，家ごとの飲物となった。（布目・中村 1985: 88）

茶之為飲，発乎神農氏，聞於魯周公，斉有晏嬰，漢有揚雄・司馬相如，呉有韋曜，晋有劉琨・張載・遠祖納・謝安・左思之徒，皆飲焉。滂時浸俗，盛於国朝，両都并荊渝間，以為比屋之飲。(『茶経』巻下六之飲)

つまり，喫茶習俗は有史以前にはじまり，西周初年にはすでに広く知られるようになり，晋代へ連綿と続いてきた。唐代になるともはや人々の日常的な飲食生活習慣になった，と陸羽は考えていた。喫茶の起源を神農時代と主張したのは，恐らく喫茶の効能に説得力をもたせるための便法であったろう。しかしそれが多くの賛同を得たとはいいがたかった。

たとえば，陸羽より少し早く登場した楊華は『膳夫経』において，次のように記している。

茶について，むかしはこれを飲むことを聞かず，近くは晋（265-420年）・宋（420-479年）以降，呉（現在の江蘇省一帯）の人はその葉を採って煮，これを茗粥とした。開元（713-741年）・天宝（742-755年）の間に至り，やや少し茶があらわれ，至徳（756-757年）・大暦（766-779年）にはかくて多くなり，建中（780-783年）以後は盛んになった[1)]。

茶，古不聞食之，近晋宋以降，呉人採其葉煮，是為茗粥。至開元天宝之間，稍有茶，至徳大暦遂多，建中以後盛矣。

楊華は晋南北朝時代に喫茶習俗があったことを認めたが，いわゆる神農起源に触れていない。陸羽と同時代で「大暦十才子」の一人である韓翃は，「呉の主が賢士を礼遇したときに，はじめて茗を設けた。晋の臣が客を親しんだときに，やっと分茶（一種の喫茶法）があった」(呉主礼賢，方聞置茗。晋臣愛客，纔有分茶。『全唐文』巻444韓翃・為田神玉謝茶表）と記している。魏晋時代に社交の場で茶で客をもてなす儀礼化した喫茶つまり「分茶」が開始されたと考えた。

宋代になると，張淏は『雲谷雑記』巻2のなかで次のように記している。

飲茶は何時はじまったか分らない。欧陽公『集古録跋』にいう，「茶が以前の歴史に見えるのは，思うに魏・晋からあった」と。私は次のように考えた。『晏子春秋』に，「晏嬰は斉の景公（紀元前547-490年）の宰相であったとき，玄米の飯と，3羽の鳥の焼いたものと，5個の卵と，茗菜を食べるだけであった」と。(原注，『晏子春秋』を読むものの多くは，この文には誤脱があると疑っている。私は後に『太平御覧』の茗の項目のなかにもこれが載っていることを発見したが，その文はまさに同じであり，従ってもともと誤脱はない。）また，王褒「童約」に「武陽（原注，一に武都となす）で茶を買う」という言葉があり，すなわち魏・晋以前すでに茶があった。ただし当時は飲茶を知ってはいたけれども，後世のように盛んではなかったのである。郭璞による『爾雅』の注に，「茶の樹は梔子に似，冬に葉が生え，炙って羹を作って飲むことができる」とある。しかし茶は冬になると味が苦くて渋く，どうして羹を作って飲むことができるのであろうか。郭璞は，また，「これを飲むと十

分に眠られなくなる」という。張華は茶を得，奇聞として，『博物志』に載せた。飲むものが少ないだけではなく，茶を識るものも少なかったのだ。唐の陸羽が『茶経』3篇を著し，茶についての記述が十分にそろい，天下にようやく飲茶が知られるようになった。その後，茶を貴ぶ風潮が生まれ，回紇が朝廷に参内したとき，茶馬貿易がはじまった。

飲茶不知起於何時。欧陽公『集古録跋』云，茶之見前史，蓋自魏晋以来有之。予按，『晏子春秋』，嬰相斉景公時，食脱粟之飯，炙三弋，五卯茗菜而已。（読『晏子春秋』者，多疑此文闕誤。予後見『太平御覧』茗事中亦載此，其文正同，初非闕誤也。）又王褒「童約」有「武陽（一作武都）買茶」之語，則魏晋之前已有之矣。但当時雖知飲茶，未若後世之盛也。郭璞注『爾雅』云，樹似栀子，冬生葉，可炙作羹飲。然茶至冬味苦渋，豈復可作羹飲耶。飲之令人少睡，張華得之以為異聞，遂載之『博物志』。非但飲者鮮，識茶者亦鮮。至唐陸羽著『茶経』三篇，言茶者甚備，天下亦知飲茶。其後尚茶成風，回紇入朝，始驅馬市茶。

喫茶の起源の明確な年代が分からないが，喫茶の習俗は春秋時期にすでにあったと張淏はいっている。特定できなくでも，喫茶の起源が遥かに古かったという認識がうかがえる。郭璞の『爾雅』注は喫茶の食用起源説の重要な史料として有名であるが[2)]，筆者はここの羹と前述した粥と同じく煮点てた茶を指すと考える。張淏は苦くて渋い冬の茶が料理のスープに適さないことを理由に，郭璞の解釈に疑惑を抱いた。また，『博物志』はあらゆる種類の異事奇聞を集めている書物であるから，『博物志』に喫茶の史料が収録されたことは晋代では喫茶がまだ珍しく，茶を知る人も少なかったことを反映していると彼は考えていた。喫茶の流行について陸羽の功績を強調し，茶馬貿易の濫觴もここにあり，魏晋南北朝の喫茶状況をさほど重視しない見方といえよう。

唐宋人の所説を比較すると，唐代では魏晋南北朝の喫茶状況にかなり高い評価を与ているが，その後の宋代ではこれに代えて唐代の喫茶状況を強調している。そうすることによって喫茶習俗の発展における陸羽の重要性が強調されているのである。欧陽修の『集古録跋尾』巻8唐陸文学伝もまた，その見方の一つで，

茶が前史に見えるのは，思うに魏・晋からすでにあったが，後世に茶をいうものは必ず陸鴻漸をもととしている。茶の書物を著すことは，彼からはじまったためであろう。

茶之見前史，蓋自魏晋以来有之，而後世言茶者必本陸鴻漸，蓋為茶著書，自其始也。

とあり，その功を陸羽の『茶経』に帰している。

つまり，宋代より溯って唐代の理解に立つならば，魏晋時代の喫茶文化史上の重要性は大いに注目する必要があるといえよう。

1.2　従来の研究成果

中国茶史研究のなかで魏晋南北朝時代の茶に関する研究成果は極めて少ない。今までの魏晋南北朝に対する茶史研究の成果としては次のものが挙げられる。

（1）魏晋南北朝時代だけを論じたもの

単著はなく，論文は以下の3本だけである[3)]。

欧陽（1991）は茶が薬として飲まれ，日常の食材と同じく売られ，宮廷から民間まで広く喫茶が盛んではあったものの，北方の人は好まなかったことなどを指摘している。

周（1994）は欧陽（1991）より詳細に論じ，現象だけではなく，その原因をも重要視している。晋代において北方の喫茶が次第に盛んになったこと，南朝期において南方では以前より盛んになったが，北方では衰えたことを指摘した。北方で喫茶が衰えた原因について，茶の産地から遠方にあったこと，元来，喫茶の伝統がなかったこと，北朝上層部が喫茶を提唱しなかったこと，さらに遊牧民の中原進出などを挙げている。

孫（1996）は喫茶と飲酒を比較し研究するという新しい視角を提示したが，魏晋南北朝の喫茶を紹介する程度にとどまり，喫茶と飲酒との関係には全く触れていない。

以上の研究成果について，史料上から見ると，新たな史料の発掘や史料の考証の点で不十分と思われる。

（2）通史的研究の一部として触れたもの

矢野（1916）は茶に関する通史的な研究のなかでも早期の文献にあたるが，発表後約85年を経ても基本的な文献として色あせていない。

中村（1984）の内容は茶の点て方に焦点をしぼって，詳細な考察を加え，喫茶が羹から独立したという説を唱えた。

陳（1984）は中国茶史の概説書である。全体像を見るには大変便利である。

布目（1995）は魏晋南北朝の喫茶について，これまでもっとも綿密な論考をしている。呉の朝廷においては，古来からある酒に対して，茶がかなりの程度までに対等の飲料としての位置を占めるまでになっていたことや，銘茶が出現したことや遠隔地にまで流通していたことなどを指摘している。

朱・沈（1995）の魏晋南北朝時代の喫茶に関する部分は，喫茶習俗が中国全土にお

いて定着し，中国茶文化体系が初歩的に形成され，儒・道・仏三教の影響を受けたと指摘し，魏晋南北朝時代の喫茶を評価している。

関（1999）は「荈賦」に関する研究である。「荈賦」は茶樹の成長の環境，茶摘み，水の選択，茶の作法の由来，茶器の選別，茶湯の様子，茶の効用などについて触れているため，「荈賦」の研究を通して晋代における喫茶の文化の全体像がうかがえる。最後に，陸羽の茶道の雛型は晋代に形成したと指摘している。

（3）『茶経』の研究のなかで論及されたもの

『茶経』研究には膨大なものがあるが，なかでも諸岡存，青木正児，布目潮渢，呉覚農の諸氏は緻密な考証をした点で注目される。『茶経』は中唐以前の茶文化の総括でもあるため，上記の『茶経』についての研究は同時に魏晋南北朝の茶史研究の基本的な文献でもある。

中国茶史の研究のなかで，茶文化の成立期としての魏晋南北朝時代はもっとも研究の手薄な部分である。その理由を探れば，まず魏晋南北朝時代の喫茶風習は成立期にあるため，定型化されることが少なく，文献記録も曖昧であること，次に魏晋南北朝時代の文献自体が少なく，かつ非常に簡略で，伝播・印刷の過程のなかで誤られた点も多かったことなどが挙げられる。他に，茶史研究の理論的視角と研究方法に関する問題も存在する。

これらの研究成果によって，魏晋南北朝の喫茶文化に関する史料は網羅され，基本的な事実はある程度明らかにされている。しかし，さらに研究を進めるには魏晋南北朝文化史の一端として，喫茶風習を包括的に把握する必要があると考えられる。それに相応して現存する史料の範囲を広げ，茶と直接関係を持たない史料を用いる必要がある。まず，文化史における喫茶と魏晋の風流の思想との関連を検討したい[4)]。

2　魏晋の風流と喫茶

2.1　魏晋の風流

「風流」という言葉は，漢代から頻繁に使用されている。『漢書』巻100下叙伝下に，

> 天が上にあり，沢が下にあり，春雷が奮いおこり，先王は天象を観て，よって礼楽を制定した。その後，礼楽が崩壊して，鄭・衛の荒淫の音声がおこり，風が流れて湎々と止めどなく，民は感化されて紛々と乱れた。

上天下沢，春雷奮作，先王観象，爰制礼楽。厥後崩壊，鄭衛荒淫，風流民化，湎湎紛紛。

とある。顔師古は「風流民化」について，「上風が流れて，下人が感化されることをいう」（言上風既流，下人則化也）と解釈しており，すなわち上層社会の慣習が流布すると，下層の民が感化されることを意味する。

その後，「風流」という言葉は，ある才能がすぐれ，精神上深遠な境地に達した士人の気質の顕現という意味を持つようになった。次の『三国志』巻40蜀書・劉琰伝にある「風流」はこの用例である。

先主が豫州にいた頃，琰を召し出して従事（州長官の佐吏）としたが，同族であることと，風流があり，談論を得意としたために，親しく接して厚遇した。かくて随行して各地を遍歴したが，先主は琰をつねに賓客とした。

先主在豫州，辟為従事，以其宗姓，有風流，善談論，厚親待之，遂随従周旋，常為賓客。

また清談（魏晋の頃の人が行った老荘思想に基づく哲学的な談論）は風流であり，清談を行うものは風流人なのである。『中興書』には次のようにある。

殷浩はすじみちをよく説き，談論が精緻で，『老子』『周易』に通じていたため，風流のものは皆彼を第一人者として依った。

浩能言理，談論精微，長於『老』『易』，故風流者皆宗帰之。（『世説新語』賞誉第八，劉孝標の注から引用）

魏晋の風流について，袁行霈氏は次のように定義している。

いわゆる「魏晋風流」とは，魏晋という特定の時代に形成された人物の審美の範疇である。風流は魏晋の玄学に伴って興り，玄学が唱導する深遠な精神と相表裏し，精神上深遠な境地に達した士人の気質の顕現したものである。換言すれば，それは魏晋時代の士人が追求した一種の魅力と影響力のある人格美である。（中略）玄学とは，一種の哲学思想・時代思潮である。風流とは，この思想・思潮の影響における士人精神世界の外面で，言葉遣い・立ち居振舞い・趣味・風習に表現されることが多い。日常生活に現れている人生の基準である。（袁 1991: 572-573）[5)]

この定義はまことに周到で，筆者もこれに従いたい。ことに重要な指摘は，風流は文人の精神から社会風習に発展し，言語や立ち居振舞いという身体的表現を伴うものであるという点であり，これによって喫茶も正に風流の一種になり得るのである[6)]。

袁行霈氏は魏晋風流を次の四つの段階に分けている。

第一段階の「竹林風流」は，いわゆる「竹林の七賢」の言動に代表され，その荒唐さや酒浸りな様子は容易に連想される。

第二段階の「中朝風流」は，裴楷と王衍がその代表である。一方では，石崇のような「楊朱」思想[7]のもとに自然を標榜し，贅沢三昧をするものがあり，また一方では，楽広のように名教を提唱し，贅沢を否定するものもいる。名教と自然の関係[8]を調和することが特徴であり，郭象はその代表的な人物である。王衍は高い位にありながら清談にふけり，郭象の類である。

第三段階の「東渡風流」は，謝安と王羲之を代表とする。東晋初頭の社会情勢は西晋初年の頃とは異なり，直接的な強力な北方遊牧民族の脅威があって，政治上の能力が求められ，清談にふけることが貶められた。

この後は顧愷之と陶淵明を代表とする「晋末風流」の第四段階である。この段階になると，魏晋風流に求めてきた「自然」が頂点に達した。

2.2　喫茶の風流

晋代には風流の士人，そのなかでもとくに領袖格とされるものが喫茶を好んだことは，喫茶に格調を与え，喫茶の風流の形成・普及を促した。たとえば，『太平御覧』巻867飲食部・茗に，「晋の司徒長史の王濛は喫茶を好む」（晋司徒長史王濛好飲茶）とある。

王濛は外戚であり司徒左長史（司徒府の属官）であったが，これといった政治的・学問的実績がなかったし，そして若くして世を去った。しかし風流人としての王濛はつねに高い評判を得ていたことが『晋書』巻93王濛伝に見える。

> 王濛は少年時代放縦不羈であり，故郷では評価されなかった。晩年になってから克自勉励して，風流の誉があった。自分の心をむなしくして人のいうことを聞き入れ，思いやりの心があり，王濛を敬愛しないものはいなかった。（中略）当時の人は劉惔を荀奉倩，王濛を袁曜卿と比べ，およそ風流と称するものは王濛・劉惔を第一としていた。
>
> 王濛少時放縦不羈，不為郷曲所歯。晩節始克自勵行，有風流美誉。虚己応物，恕而後行，莫不敬愛焉。（中略）時人以惔方荀奉倩，濛比袁曜卿，凡称風流者，挙濛惔為宗焉。

さらに，もう一人の風流人の桓温は茶宴を設け，茶果で客をもてなすことで節約を標榜した。『晋書』巻98桓温伝に，

> 桓温は倹約の性質があり，宴会ごとに7皿の茶果を出すのみであった。
>
> 温性倹，毎讌惟下七奠柈茶果而已。

とある。桓温といえば，よく後世にいわれるのは，何回も北伐し，中国の統一を主張したことである。太和6年（371年）11月，海西公を追い落とし，簡文帝を立て，朝廷

の政権を握り，禅譲を図ったが，実現せずに死んでしまった。桓温は政治の面で権力の最高峰に至っただけでなく，この時代の代表的な風流人でもあった。その史料は次の『晋書』巻93王濛伝にある。

> 簡文帝が会稽王のときに，孫綽と風流人について話した。孫綽がいうには，「劉惔は清蔚簡令で，王濛は温潤恬和で，桓温は高爽邁出で，謝尚は清易令達です。しかし王濛はその性格はやさしくよく理をいい，言葉は少なかったが筋が通っています」。
>
> 簡文帝之為会稽王也，嘗與孫綽商略諸風流人，綽言曰，劉惔清蔚簡令，王濛温潤恬和，桓温高爽邁出，謝尚清易令達。而濛性和暢，能言理，辞簡而有会。

桓温は王濛と共にときの風流人として挙げられた。さらに桓温が崇拝した人物がいる。それは司馬懿と劉琨である。『晋書』巻98桓温伝に次のように記している。

> はじめ桓温は自ら雄姿風気を宣帝（司馬懿）・劉琨と同等と任じており，王敦と比べられるとはなはだ不平そうであった。今度の戦争から帰って，北方で得た一人の，女性の仕事に巧みな老婢を訪ねると劉琨の妓女であった。彼女は桓温を一目見るとさめざめと泣き出した。桓温がそのわけを尋ねると，答えるには「あなたはとても劉司空（劉琨）に似ておられます」と。桓温は大いに喜んで衣冠を整えてまた老婢を呼んで似ているかどうかを問うた。老婢がいうには「顔はとても似ておられますが惜しむらくは痩せていることであり，目はとても似ておられますが惜しむらくは小さく，鬚はとても似ておられますが惜しむらくは赤く，姿形はとても似ておられますが惜しむらくは背が低く，声はとても似ておられますが惜しむらくは女っぽくていらっしゃいます」と。桓温は衣冠を解いて昏然と睡り，数日は喜ばなかった。
>
> 初温自以雄姿風気是宣帝，劉琨之儔，有以其比王敦者，意甚不平。及是征還，於北方得一巧作老婢，訪之，乃琨之伎女也，一見温，便潸然而泣。温問其故，答曰，公甚似劉司空。温大悦，出外整理衣冠，又呼婢問。婢云，面甚似，恨薄，眼甚似，恨小，鬚甚似，恨赤，形甚似，恨短，声甚似，恨雌。温於是褫冠解帯，昏然而睡，不怡者数日。

桓温が司馬懿を崇拝するのは比較的理解しやすい。たとい司馬懿は皇帝にならなかったとしても，晋朝の成立の基礎を築いた。桓温にも同じ野望があったためである。桓温がいつも心にかけている劉琨は，晋王朝に対して誠意を尽くした人物であるともいえる。江南に東晋を立てても，彼は北方で各地に転戦し，苦労を厭わず，衆望を博した。桓温が劉琨の容貌に似ているかどうかの話に機嫌を大いによくした原因は，容姿が秀麗であることであり，劉琨の容貌はことに有名であったのである。この場合，容姿の秀麗さはそれ自体が風流であった。また，喫茶の習慣を持つことも劉琨と桓温との共通点の一つである。劉琨の「兄の子の南兗州（現在の江蘇省江都県の東北にあたる）刺史（州の長官）の劉演に与えた手紙」（與兄子南兗州刺史演書）に，

「私の体中は，気分がくしゃくしゃすると，いつも真の茶を仰(もと)めています。あなたも置いておくとよろしいですよ」（布目 1995: 106）（吾体中潰悶，常仰真茶，汝可置之。『茶経』巻下七之事）とある。

桓温は政治的，風流的なリーダーの立場で，当時大量の俊傑を自分の采配のもとに引き付けた。魏晋風流の第三段階の代表的な人物である謝安もその一人である。

謝安は幼少の頃から桓彝・王濛などの風流名士の好評を博し，名声が四方に伝わっていた。何度も揚州太守の庾氷の招きを拒絶したが，桓温に司馬（大司馬の属官）に招かれたとき，直ちに応諾した。そして桓温に重用された[9)]。謝安が茶とかかわったきっかけは，かつて陸納を訪ねたことにあった。そのとき陸納は茶宴で謝安を招待する心づもりであった。『晋書』巻77陸納伝に次のように記している。

> 謝安はかつて陸納をたずねようとしたとき，陸納はとくにもてなしの用意をしていなかった。陸納の兄の子である陸俶は陸納にこのことを問わずに密かに用意をしていた。謝安が来ると，陸納が出したのは，ただ茶果だけであった。そこで陸俶は贅沢なご馳走をならべ，珍しい肴はちゃんとそろっていた。さて謝安が帰ると，陸納は大いに怒って「お前は父叔の誉を高めることができなかったし，また私の素朴なやり方を汚したか」といい，杖で40回たたいた。
>
> 謝安嘗欲詣納，而納殊無供辦。其兄子俶不敢問之，乃密為之具。安既至，納所設唯茶果而已。俶遂陳盛饌，珍羞畢具。客罷，納大怒曰，汝不能光益父叔，乃復穢我素業邪。於是杖之四十。

茶果でもてなすことを「素業」といっている。『六臣注文選』巻38任昉「為范尚書讓吏部封候第一表」の張銑の注に，「素業とは，素朴なやり方である」（素業，謂朴素之業也）とある。陸納の素朴なやり方は彼の酒宴にも見られる。『晋書』巻77陸納伝に次のように記している。

> （呉興）郡に行く前，先に姑孰（現在の安徽省当塗）に行って桓温に別れを告げた。そのとき，桓温に尋ねた，「あなたは酔うまでにどれ位お酒を飲まれ，どれ位肉を食べられますか」と。桓温が答えていう，「年をとってからは3升ほど飲んだら酔い，肉は10塊も食べません。あなたはどうですか」と。陸納がいうには「私はいつもあまり飲めませんが，ただ2升ぐらいです。肉もまたいうほどではありません」と。後に桓温が閑をみて尋ねた。「外にささやかな礼物があります。遠い郡に赴任するにあたり，あなたと一緒に酒を飲みたく，敬意を表します」と。桓温は喜んでそれを受け入れた。そのとき王坦之と刁彝がいたが，礼を受けると，ただ酒1斗，鹿肉1皿であって，客は大いに驚いた。陸納がおもむろにいうに，「明公（桓温）は以前酒3升飲めるといいましたが，私は2升しか飲めません。今1斗あるので，多い目に用意しています」と。桓温とほかの客はその率直さと倹約を歎じ，さらに厨房にすぐれたご馳走を設けるようにと命じ，痛飲し歓を尽くして退出した。

将之郡，先至姑孰辞桓温，因問温曰，公致醉可飲幾酒，食肉多少。温曰，年大来飲三升便醉，白肉不過十臠。卿復云何。納曰，素不能飲，止可二升，肉亦不足言。後伺温閑，謂之曰，外有微礼，方守遠郡，欲與公一醉，以展下情。温欣然納之。時王坦之，刁彝在坐，及受礼，唯酒一斗，鹿肉一枠，坐客愕然。納徐曰，明公近云飲酒三升，納止可二升。今有一斗，以備杯杓餘瀝。温及賓客並歎其率素，更敕中厨設精饌，酣飲極歓而罷。

桓温が大司馬（兵部尚書）として姑孰の鎮守にあたっていたとき，尚書吏部郎（尚書省吏部の郎官，選挙を掌る）で呉興太守に出任する陸納は，赴任する前にわざわざ姑孰へ行って，桓温を訪ねた。その後，宴をはって桓温を接待した。陸納の設けた酒盛りは極めて倹約で，「率素」と評価され，当時の贅沢な社会習俗と大きな隔たりがあり，彼の「素業」を示す茶宴と同じ効果を収めたといえよう。また，陸納も桓温と親密な関係を持っていたことがうかがえる。

風流の士人，とくに風流の領袖が喫茶に積極的にかかわることは，喫茶風習の普及にとって大きな推進力となったことは容易に推測しえよう。

北魏には，王粛の風流に注目して，喫茶に専念する人がいた。鮮卑人の劉縞である。『洛陽伽藍記』巻3城南の報徳寺条に，「当時給事中（つねに宮中にいって皇帝の左右に侍する官吏）の劉縞は王粛の風流を慕い，もっぱら茶を飲むことを習っていた」（時給事中劉縞慕粛之風，専習茗飲）とある。劉縞は，あこがれていた王粛の風流を模倣するとき，彼の趣味である喫茶を選択した。

王粛はなぜ北魏で風流の領袖になったか。『魏書』によると，王粛は王導の後裔で，父の王奐と兄弟らが斉の武帝に殺されたため，北魏に亡命した。『魏書』巻63王粛伝には次のようにある。

高祖は鄴にいるとき，王粛が来たと聞いて，襟を正して引見してその理由を問いかけた。王粛の言葉は適切で，弁にすぐれ，しかも礼に適っていたため，高祖は非常に彼に同情した。話がついに政道におよび，王粛は乱を治めることを述べた。その音韻は典雅で流暢，深く帝の御意に適った。高祖は彼を感心して受けいれ，席を近づけてときを過ごし，疲れや時間の流れに気づかなかった。よって蕭氏の滅亡の兆しや，付けこむべき機会をいい，高祖に大軍を起すことを勧めたので，南朝をうばおうとする意思が強められた。（高祖は王粛の）才能を認めて重んじることや礼遇することが日に日に篤くなり，近親や貴族，旧臣といえども誰一人としてその仲を裂くことができなかった。あるいは左右の大臣を退けて対談し，夜明けに至っても終わらなかった。王粛は忠誠を尽くし，隠れ避けることがなく，自ら我々君臣は玄徳が孔明を遇したようなものだといった。

高祖幸鄴，聞粛至，虚襟待之，引見問故。粛辞義敏切，辯而有礼，高祖甚哀惻之。遂語及為国之道，粛陳説治乱，音韻雅暢，深会帝旨。高祖嗟納之，促席移景，不覚坐之疲淹也。因言蕭氏危滅之兆，可乗之機，勧高祖大挙。于是図南之規転鋭，器重礼遇日有加焉，親貴

旧臣莫能間也。或屏左右相対談説，至夜分不罷。粛也儘忠輸誠，無所隠避，自謂君臣之際猶玄徳之遇孔明也。

以上のように，王粛は北魏に身を投じた最初から孝文帝に十分な信頼を受けていたことが分かる。それゆえ，孝文帝を補佐して，北魏の国家制度を確立する上で，自分の才能を発揮することに成功したのである。『北史』巻42王粛伝には次のようにある。

晋が滅んで世が乱れてから，礼楽は崩壊した。孝文帝は制度をあらためかえ，風俗を変更しようとしても，それは簡粗にすぎ，まだ十分ではなかった。王粛は旧事に深い理解を持ち，虚心に委嘱を受け，朝廷の儀礼と国家の典章は全部王粛によりできた。

自晋氏喪乱，礼楽崩亡，孝文雖厘革制度，変更風俗，其間朴略，未能淳也。粛明練旧事，虚心受委，朝儀国典，咸自粛出。

孝文帝は北魏の制度を変革する際，王粛を大いに頼りにした。文武兼備の王粛は名門の家柄の出身であり，皇帝に信頼され，当然北魏の社会風習を左右する力を持った。彼は北朝の漢文化，あるいは北朝における南朝文化を代表する人物になり，漢文化を受け入れる北朝の士人が，漢文化を模倣し学ぶときの模範となった。漢文化にあこがれた劉鎬から見ると，王粛の風流を象徴するもっともよい例は喫茶であったから，その模倣に力を尽くした。文明が高きより低きに流れる特徴から見ると，王粛の南朝風流は遊牧民族の劉鎬を教化，薫陶したのである。

3　茶の精神──倹

謝混の詩の風格や王献之の書道について，佐藤正光氏は次のように述べている。

それはとりも直さず詩や書によって，その人格が現されると考えられたからであろう。つまり，謝混や王献之にとって文学や書法という才芸は，それまでの清談と同様，精神の顕現であり，人格美の体現だったのである。それゆえ「風流」は，風流と称される人物の風格を現す文体，書体の用語として容易に転用されたのであろう。（佐藤 1997: 110）

では喫茶の風流はどのような表現をみせたのであろうか。桓温，陸納は茶宴を通じて「倹」，「素」などの精神を表すように努力した。陸羽の茶道の倹の精神について，布目潮渢氏によれば，次のように論じられている。

茶は「もっとも精行倹徳の人に宜し」といい，また「茶の性は倹」という，茶は行いの精れた人の飲物にふさわしいという。またこれは最近に考えるようになったことだが，法門寺から発見された宮廷用の豪華な茶器を見ると，陸羽の茶道は，庶民でも日常家庭内で用

いている飲食器類に少し手を加えれば，茶器として成立することを説いているのであり，ここに倹の意味が生きてくる。これは千利休の侘び茶の精神に通ずるものである。（布目 1995: 185）

晋代の杜育は陸羽と同じ趣旨で茶器を選択し，そこには倹の精神が反映されているともいえる（関 1999）。すなわち竹林の七賢のような荒唐無稽な酒に溺れた行動への反動として，茶の倹の精神が晋代に形成されたのである。ここでは晋代と南北朝時代に茶の倹の精神がいかに具体的に表現されたかについて議論を進めていくことにしよう[10]。

3.1　茶と茶宴の倹約

喫茶の風習は魏晋南北朝社会の各階層に広く伝わっている。この特徴から見ても茶には奢侈的な性質が備っていないと分かる。ことさらに茶をもって倹約を強調したのは南朝斉の武帝であった。『南斉書』巻3武帝紀に，

天子は剛毅なもので，決断力がある。国を治めるとき全体的な要点をおさえ，富国を優先させた。遊宴や過度に飾りたてることをほとんど好まず，つねに憎むけれど，追放することはできなかったといった。

上剛毅有断，為治總大体，以富国為先。頗不喜遊宴彫綺之事，言常恨之，未能頓遣。

とある。武帝は贅沢な遊宴を催したり，過度に飾りたてることを喜ばなかった。祖先に対する敬意を表すために，子孫は往々にして牛，豚，羊など大型の家畜を犠牲として，奢侈豪華を尽くして祖先を祭っていたが，武帝はこうしたことを防ぐために，自分の死期を悟ると詔を下して自分を祭る供え物の種類を次のように規定した。

祭事や敬礼の儀式は，本来心によることである。東隣の牛を殺して（祭る）ことも，西家の薄祭に及ばない。私の霊座には生け贄を捧げてはいけない。餅・茶・干飯・酒脯だけを捧げよ。天下の貴賤のものも，皆同じくこの制度にせよ。

祭敬之典，本在因心。東隣殺牛，不如西家禴祭。我霊上慎勿以犠為祭，唯設餅・茶飲・干飯・酒脯而已。天下貴賤，咸同此制。（『南斉書』巻3武帝紀）

「東隣殺牛，不如西家禴祭」は『周易』巻6既済に見える言葉で，武帝は『周易』を本にして，祭事は本心を出発点とすることを強調し，供え物を豪華にしてはいけないと説いた。さらに自分が定めた供え物が制度として社会に受け入れられるよう希望した。その供え物のなかには，茶も選ばれており，この供え物で先祖を祭ることは庶民でもできるので，茶を含んだこれらの供え物は倹の精神を表現する飲食物であるこ

とがうかがえる。また後掲『異苑』によれば，晋代には民間でもすでに茶を供え物として用いていたことが分かる。供え物は祭事の一部である祭宴の献立になるので，質素な供え物を用いることは質素な宴席を設けることを意味する。

桓温は茶宴を設けることで彼の倹約の精神を表明したし，陸納は茶宴を行うことを彼の「素業」，すなわち素朴なやり方の一部分と見なしている。つまり茶宴は「倹」の精神をよく表現する宴会であった。

生活が貧困であれば素朴な生活しかできない。しかし，官職につき，金持ちであるにもかかわらず素朴な節操を維持できることが尊敬されたのである。『晋書』巻42王濬伝に，

> 王濬は呉を平定してから，功績が高く，官位も重かったため，もはや素業を自任しなくなった。すなわち玉食錦服にし，気ままに奢侈をし，ほしいままにした。
>
> 濬平呉之後，以勲高位重，不復素業自居，乃玉食錦服，縦奢侈以自逸。

とある。ここで「素業」と「奢侈」は対立する概念であることが明白に伝えられている。王濬と比べると，桓温・陸納は要職にあっても，茶宴のような「素業」につとめたことで，尊敬されたのである。

もちろん茶宴の倹約の特徴はまず茶によるものであるが，それは茶果にも表われている。茶果はそのほとんどが果実・五穀・野菜を原材料としており，山海の珍味を原材料とする酒宴の料理と大きな違いがある（関 1997）。

質素な飲食を表す例として，荊州刺史の殷仲堪が洪水に遭ったときの食事を見てみよう。『世説新語』徳行第一に次のようにある。

> 殷仲堪（いんちゅうかん）は荊州（けい）の長官となってから，洪水で凶作にあい，食事はいつも5碗だけ，盛鉢（もりばち）のそこには付け合わせの料理もなかった。飯粒が盛鉢や座席のあたりに落ちると，いちいち拾って食べた。人びとに模範を示そうという気持ちもあったが，同時に生地のままの性質のあらわれでもあった。彼はいつも子弟に告げていった。「わしが州の長官に任命されたからといって，今までよりも気が大きくなったなどと思ってはいけない。いまこの地位にいても，わしの気持ちに変わりはない。貧乏は男子につきものだ。枝の上に登ったからといって，その根もとを切りすてることはあるまい。お前たちもこのことをよく心がけておくがよい」。
>
> 殷仲堪既為荊州，値水，倹食，常五盌盤，外無餘肴。飯粒脱落盤席間，輒拾以噉之。雖欲率物，亦縁其性真素。毎語子弟云，勿以我受任方州，云我豁平昔時意。今吾處之不易。貧者士之常，焉得登枝而捐其本。爾曹其存之。

自然災害に遭ったとき，皇帝あるいは地方の行政長官が膳を減らして，自省・自罰を示す例がしばしば見られる。殷仲堪は5碗のおかずのみを設けることによって倹約

と見なされ，真率素朴と誉められた。殷仲堪の5碗のおかずは桓温の7皿の茶果と同様に彼らの倹約を表わしている。

桓温と陸納の倹約の茶宴であれ，殷仲堪の節約の飲食であれ，すべて飲食以外の意義を持っていた。すなわち自己の倹約の準則をもって社会の価値観の変化を導こうと試みていたのである。生活における奢侈や荒唐極りない酒浸り，政治的無責任は魏晋時代の貴族社会の一つの側面である。喫茶および喫茶における倹の精神の成立はそれに対する反動とも見られる。喫茶の倹約の精神を提唱していた桓温と陸納は，皆魏晋風流の第三段階の人物である。第三段階の風流について，袁行霈氏は，

> 風流はもはや俗世を軽蔑することや，気が狂った振りをすることや，放埒な行いをすることなどが主な表現にはならなくなった。かえって，政治的にうまく応対できる才能や政界での身の処し方が豁達であること，および身が朝廷に在っても心は隠居生活を恋しがるなど超然とした態度をとることで表現されるようになった。（袁 1991: 577）

と指摘している。政治上の無責任に対する反省も喫茶および喫茶の倹の精神を成立させる動力であろう。晋代における喫茶風習の発展は風流観の変化に同調していたともいえよう。

3.2　茶の価格

茶が倹約の意味合いを持っているなら，値段もそれに応じて廉価なはずであろう。惜しいことに，魏晋南北朝時代の茶の価格についての明確な記載は見られない。しかし魏晋南北朝には茶に見る倹約の象徴的意義が何度も強調されていたことや社会の各階層が茶を飲んでいたことから，茶の価格は庶民の手に届かないほど高くはなかったと判断できる。また，遅くとも「茶酒論」が書かれた中・晩唐の時代までは茶はやはり安価であった[11)]。

「茶酒論」には2ヶ所ほど茶と酒の値段についての論争が行われている。

酒が「茶は3文で1杯の安い値段であるから，何年したら富を得られるのか」と問うと，「茶は市場に入ったばかりだから」と茶はいい逃れをした。

続いて酒は「茶は安ければ3文で5杯の値段，酒はいくら安くても半碗で7文もする」と責める。茶はやはり正面の論争を避けていた。これもまた茶賤酒貴の事実を裏付けているのである[12)]。

布目潮渢氏は「この段階（筆者注，西晋時代）での喫茶は，上流社会のものと考えるべきであろう」と指摘している（布目 1995: 84）。上流社会の飲料とすれば，茶は贅沢品に属するように思われる。上流社会から庶民へ普及して行く考え方は，茶の

輸入国であった日本やイギリスにとっては適切であるが，喫茶の起源地である中国にとっては不適切であろう。日本やイギリスにおいて最初に喫茶という外来文化を受けいれるのはもちろん上流社会であり，これらの国では茶は高価であった。喫茶風習の普及と定着に伴い，各階層に向けた様々な茶が出てきて，そのなかには高価な品物もあれば，安価な品物もある。茶の消費層が拡大していることをふまえると，茶の価格は少なくとも収入と比べると，相対的に下がっていることがうかがえる。

喫茶の起源地である中国では，最初の茶は東亜半月弧の範囲内の高度な文化を持つ四川地方において向精神性の強い健康飲料であった。照葉樹林地域である四川地方では茶樹は自生し，焼畑の農法によって繁殖していたため（上山 1977: 124），原材料が手に入りやすいことを考えると，茶は商品として成立したとしても，価格は高くなかったはずであろう。四川地方の蜀・巴などの古国が秦に滅ぼされて，その文化は速やかに中原に浸透し，そのなかには喫茶も含まれていた。晋代には中原文化の中心地の洛陽において喫茶がすでに受けいれられ，茶は四川地方の向精神性の強い健康飲料から中国全土の嗜好飲料へと変貌を遂げた。そして上層社会向けの茶が生産され，茶の高級化の傾向が出はじめたとはいえ，極端に価格が高騰したのは宋代である。

中国においてはどの時代でも各階層に向いた茶が生産されていたため，贅沢品の高級茶はそのなかの一部しか占めなかった。しかし魏晋南北朝時代の茶は，唐宋時代に比べると，まだ洗練の度が低く，技術的にも単純であったため，高価にはならなかった。それは魏晋南北朝における茶の倹約の精神を成立させる物質的基礎となりえたであろう。茶文化早期における茶の高級感は，それほどなかったといえよう。

4　宮廷・官僚の喫茶

4.1　宮廷の喫茶と御用茶園の成立

韋曜は酒に弱く，呉の末帝である孫皓に寵愛されたとき，酒の代わりに茶を飲んでもよいとの特別な許可を得た。『三国志』巻65呉書・韋曜伝に，

> 孫皓は，宴会を開けば必ず夜にまでおよび，その席に加わったものは，飲めるものであろうとなかろうと，ひとしなみに7升（1.5リットルほど）は飲まねばならず，その全部を飲めないものも，みなあたりにたれこぼしても定量を飲み干したふりをした。韋曜は，元来，酒は2升までしか飲めず，はじめ特別の礼遇を受けていた頃には，いつも量を減らしてもらい，あるいはひそかに酒の代わりにお茶を賜わったりしていたのであるが，寵愛が衰えてくると，強いて7升を飲ませられ，それが飲めずにいつも罰を受けた。（小南 1993: 175）

皓每饗宴，無不竟日，坐席無能否率以七升為限，雖不悉入口，皆澆灌取盡。曜素飲酒不過二升，初見礼異時，常為裁減，或密賜茶荈以当酒，至於寵衰，更見偪彊，輒以為罪。

とある。韋曜が呉の宮廷の宴会で茶を飲んでいたということは，皇帝・皇族が日常的に飲用するためにつねに茶を備えていたということを物語っている。

皇帝の喫茶に関する直接な記録は次の『晋四王起事』にある。

『晋四王起事』に，「晋の恵帝が都落ちし，のち都の洛陽に還ってきたとき，黄門（宦官）が素焼きの盂（はち）に茶をいれて至尊（恵帝）に上（たてまつ）った」とある。（布目・中村 1985: 116）

『晋四王起事』，恵帝蒙塵，還洛陽，黄門以瓦盂盛茶，上至尊。（『茶経』巻下七之事）

「蒙塵」というのは晋の恵帝が「八王の乱」で連行されたことを指す。洛陽に還ってきた際，黄門侍郎が素焼きのはちに茶をいれて恵帝に奉った。この記事の意味について，布目潮渢氏は「皇帝の喫茶が日常茶飯事となっていたのなら，この記事は残らなかったであろう。恵帝がとくに喫茶を好んでいたから，首都帰還後まっさきにしたことは茶を喫したことだったと見るのも一つの解釈であろう」と推論している（布目 1995: 94）。筆者はこの史料は当時君臣の境遇がいかに窮迫していたかを表し，素焼きのはちはこの境遇に対応する器具であると考える。『晋書』巻4恵帝紀に，光熙元年（306年）5月己亥，「祁弘らは皇帝を奉じて洛陽に還ったが，皇帝は牛車に乗り，行宮には草を敷き，公卿も原野を歩く状態であった」（弘等奉帝還洛陽，帝乗牛車，行宮藉草，公卿跋渉）とあり，恵帝と大臣らの首都帰還の途中の悲惨な状況が生々しく書かれている。

こんな状況のなかで，なぜ茶を飲むのか。個人的な原因として，布目潮渢氏は恵帝がとくに喫茶を好んでいたという点を挙げている。この推論を証明する史料がないが，恵帝のまわりには，喫茶に熱中する官僚文人が多かったことは確実である。杜育，劉琨などの有名な茶人は「八王の乱」以前から「賈謐二十四友」という文人サロンのメンバーとして恵帝に近づいていた。もう一つの可能性として，喫茶は飲食以外の儀礼の意味を持つことが挙げられよう。晋代から茶で客をもてなすことがしばしば見える。

晋代の皇室の喫茶は温嶠の上奏文によって実証できる。『本草衍義』巻14には，「また晋の温嶠が上奏して，茶千斤，茗300斤を貢した」（又晋温嶠上表，貢茶千斤，茗三百斤）とあり，現在のいい方でいうと，「茶」は春の茶，「茗」は秋の茶を指す（関 1999）。温嶠に献上された千斤の茶と300斤の茗は膨大な量といえる。この大量の茶は皇帝を中心とする皇室に供するだけではなく，賜物として皇帝が大臣に賜ったと考

えられる。このことは晋代における宮廷および上層社会の喫茶が盛んになっていたことを反映している。

宮廷および上層社会の喫茶をさらに保証したために，茶の生産機構は陶磁器よりもいち早く成立した。最初の御用茶園についての記録は東晋に続いて興った南朝宋に現れる。『呉興記』に「烏程（現在の浙江省湖州の南）の温山（原注，県の北西20里）で御荈を産する」（烏程，温山(県西北二十里)出御荈）とある。

皇帝の御用の茶が決まった場所で生産されるということは，喫茶風習が皇室で定着していたことを反映している。また幼い王子の喫茶の記録もあるが，それについては後述する。

その後の斉の皇室でも，喫茶の風習が定着していた。斉の武帝が詔勅を発して太廟の供え物の具体的な種類を次のように規定した。

> 永明9年（491年）に，（武帝は）太廟の四時の祭りについて詔勅した。宣皇帝に起麺餅と鴨臛を薦め，孝皇后に笋・鴨卵・脯・醤・炙白肉を薦め，高皇帝に肉膾と葅羹を薦め，昭皇后に茗・糌・炙魚を薦める，と。これらはすべて平生に好まれたものである。
>
> 永明九年，詔太廟四時祭，宣皇帝薦起麺餅鴨臛，孝皇后薦笋鴨卵脯醤炙白肉，高皇帝薦肉膾葅羹，昭皇后薦茗糌炙魚。並生平所嗜也。（『南史』巻11后妃・斉宣孝陳皇后伝）

供え物を決める基準は祭祀される人の生前の好みである。太祖の蕭道成の妻である劉智容に茗・糌・炙魚を薦めるため，劉皇后は生前に茶を特別に好んでいたことが分かる。武帝は遺詔のなかで，将来自分を祭る供え物を次のように明確に定めている。

> 私の霊座には生け贄を捧げてはいけない。餅・茶・干飯・酒脯だけを捧げよ。天下の貴賤のものも，皆同じくこの制度にせよ。
>
> 我霊上慎勿以牲為祭，唯設餅・茶飲・干飯・酒脯而已。天下貴賤，咸同此制。（『南斉書』巻3武帝紀）

そのなかにも茶があったことから，帝王や后妃たちには茶を嗜む人が多かったと思われる。また，武帝が茶などを供え物にするのは倹約を示す目的があり，当時の茶は贅沢品ではないことをあらためて強調していた。周兆望氏の「この前，民間に茶を供えることはすでに流行していたことを反映している」という指摘は（周 1994: 228），史料を誤読しているとしか思えない。

4.2　最高の飲料とされる茶

安平（現在の河北省安平）人の張載は太康（280-289年）のはじめに，四川に至って，蜀郡の太守である父張収を見舞った[13]。そのとき，「成都の白菟楼に登る」（『全晋詩』巻7登成都白菟楼）という詩を書いた。その茶とかかわる部分を引用する。

借問揚子宅　揚雄がいた処はどこかとたずね，
想見長卿廬　司馬相如の廬を想い見る。
程卓累千金　程鄭や卓王孫のような富豪は千金を累ね，
驕侈擬五侯　その驕侈は五侯に匹敵する。
門有連騎客　門には大勢の騎馬を連ねた客が訪れ，
翠帯腰呉鉤　その客は翡翠の帯に呉の名剣を腰している。
鼎食随時進　鼎に盛った料理はいつでも客に進められるようになっており，
百和妙且殊　そのご馳走はすぐれて独特の味がする。
披林採秋橘　林をおしわけて秋の橘を採り，
臨江釣春魚　大江に臨んで春の魚を釣る。
黒子過龍醢　黒子は龍の醢より過れ，
果饌踰蟹蝑　果饌は蟹の蝑より踰っている。
芳茶冠六清　芳しい茶は六種の清涼飲料より冠んで，
溢味播九区　そのすぐれた味は九区に播わっている。
人生苟安楽　この世にかりに安楽の地を求めるなら，
茲土聊可娯　この成都がまあ娯しめる所であろう。（布目・中村 1985: 110）[14]

布目潮渢氏は「西晋時代の四川省の成都で，茶が飲料の筆頭の地位を占めていて，成都だけではなく，中国全土に広がっていたように詠じられていたことに注目したい」と指摘し（布目 1995: 84），筆者も同感である。茶はもともと南方の飲料であり，西晋は中国を統一して，政治・文化の中心である首都の洛陽における喫茶の史料もある。以下の史料を見ると，茶を最高の飲料とする見方は文人の世界や成都の地域に限らなかったともいえよう。

左思の愛娘の恵芳と紈素が洛陽で楽しく茶を点てていたことが，『玉台新詠』巻2左思・嬌女詩に見える。

翰墨戢閑按　筆や墨は箱に収めて撫でていたかと思うと，
相與数離逖　二人そろってしばしば逃げ出す。
動為鑪鉦屈　物売りの鳴らすどらや鐘にはわざわざ外へ出，
屣履任之適　靴の行くにまかせて歩く。
止為荼舛拠　ただ茶舛をたてるときはじっとしているが，
吹噓対鼎鑼　口で釜の火を吹いたりしはじめる。
脂膩漫白袖　それで白い袖にあぶらじみが広がり，

煙薰染阿錫　すすが布地をまっくろに染める始末。
衣被皆重地　着物はみなよごれでべたべたになり，
難與沈水碧　水につけて洗い落とすのも容易じゃない。（石川 1986: 188）

天真爛漫のお嬢さんにとって喫茶は何よりも魅力であった。

南朝梁には茶が君臣の間の贈り物となることもあった。昭明太子は『文選』を編集したことで文学史に名を残した。彼は劉孝綽の才気を高く買って，自分の文集の編集と序文を書くことを劉孝綽に任せた[15)]。昭明太子の3番目の弟で，後に簡文帝となった晋安王の蕭綱は，劉孝綽に飲食品を贈ったことがあり，そのなかにも茶が含まれていた。これに対し劉孝綽は「晋安王より米などを送られたことに対するお礼の手紙」（謝晋安王餉米等啓）を書いて感謝の意を表した。そのはじめの部分には「伝詔官の李孟孫が王のお言葉を伝え，かたじけなくも米・酒・瓜・笋・葅・脯・酢・茗の8種を賜りました」（伝詔李孟孫宣教旨，垂賜米酒瓜笋葅脯酢茗八種。『茶経』巻下七之事）と述べ，張載ほど高く評価しなかったが，茶が米などの飲食品と同列にされていることから，簡文帝と劉孝綽は日常的に茶を愛飲していたことはうかがえる。

4.3　喫茶史料に関する考察

晋・干宝の『捜神記』巻16に茶に関する記述がある。

夏侯愷，字は万仁，病気で死んだ。一族の子供の苟奴にはいつも亡霊が見えた。亡霊の夏侯愷はしばしば帰ってきて，馬とその病妻を連れ帰ろうとした。夏侯愷は平上幘という頭巾を著け，尊者の服である単衣を着て，内に入り，生前に使っていた西側の壁のところの大床に座り，茶を人に求めて飲んだ。

夏侯愷字萬仁，因病死。宗人児苟奴素見鬼，見愷数帰，欲取馬，并病其妻。著平上幘，単衣。入，坐生時西壁大床，就人覓茶飲[16)]。

夏侯愷が死んで鬼になっても喫茶を忘れなかったという物語から，彼は生前にも茶を好んでいたことがうかがえる。

『捜神後記』巻3に，ある将軍を主人公とする茶にかかわる不思議な物語がある。

桓温の時代にある督府の将軍が流行り病に罹り，その後虚熱が出たので，さらに複茗をよく飲み，1回ごとに必ず1斛2斗（25.54リットル）で満足した。しかも升合というわずかの量を減らしても，足りないと感じた。それをしばらく続けて，家は貧しくなってしまった。その後，ある客が彼を訪れてきたが，ちょうど彼が複茗を飲んでいた。客はすでにこの病のことを知っており，その上にさらに5升の茶を飲ませて，そこで激しく吐いた。升ほどの大きさのものを吐き出し，それには口があり，形や質感は縮んでしわだらけになって，牛の胃のようであった。客はこれを盆の上に置かせ，そのなかに1斛2斗の複茗を注ぎ入れる

と，このものは全部吸ってしまい，少しふくらんだ。また5升を入れると，全てを口のなかから出してしまった。将軍はこのものを吐くと，病気もすっかり治った。ある人が彼に「これは何という病気ですか」と聞いたところ，「この病は斛二瘕という」と答えた。

桓宣武時，有一督将，因時行病後虚熱，更能飲複茗，必一斛二斗乃飽。纔減升合，便以為不足。非復一日，家貧。後有客造之，正遇其飲複茗。亦先聞世有此病，仍令更進五升，乃大吐。有一物出如升大，有口，形質縮縐，状似牛肚。客乃令置之於盆中，以一斛二斗複茗澆之，此物噏之都盡而止，覚小脹。又増五升，便悉混然従口中涌出。既吐此物，病遂差。或問之，此何病。答云，此病名斛二（原注，二或作茗）瘕。

『隋書』巻33経籍志・史部には，「『捜神後記』10巻，陶潜撰」とあるが，仮托説が有力である。しかし，『捜神後記』が六朝に完成したものであることは確実である。『捜神後記』は怪異小説で，作者は一方では奇妙なことを集め，一方では当時理解しがたいことを手直ししてさらに神秘的なものとし，怪異小説の題材に合うようにしたのである。当時の文学上の努力は，今となっては謎を解く過程で障害となっている。しかし，東晋の前期という時代背景と主人公が督府の将軍であることが現時点では分かる。欧陽氏はこの物語によって，「東晋時代にある人は長期に喫茶をしすぎるので，病気になった」と指摘しているが（欧陽 1991: 195），因果関係を逆にしてしまったと思う。

以上の物語を喫茶史上どう見るか。歴史事実としては取り扱えないが，晋や六朝時代の作品であるので，その時代の認識を表していると思う。これらの物語には喫茶自身が奇談な要素のではないことから，喫茶は晋代の日常生活に馴染んでいたと思われる。さらに督府の将軍はトップ・クラスの官職ではないのに，ある程度長い時期において極めて大量な茶を飲むために生活が貧しくなったことから，茶の価格は極端に高くもないが，安くもなかったと推論できる。

4.4　北朝の喫茶

北朝の喫茶に関する史料は『洛陽伽藍記』巻3城南の報徳寺条に集中し，次のように記している。

粛は帰順した当初，羊の肉や酪漿などのものは食べず，いつも鯽魚の羹（あつもの）を食べ，喉が渇くと茗汁（おちゃ）を飲んだ。そこで都の士人は，「粛は一度に1升飲む」といい，漏巵（ろうし）（底なしのさかずき）とあだ名した。数年経ってから，粛は高祖と宮殿で会食したときに，羊の肉や酪の粥をたくさん食べた。高祖はいぶかって尋ねた，
「中国の食物のなかで，羊の肉は魚の羹と比べてどうかね。茗飲（おちゃ）は酪漿と比べてどうかね」
すると粛は答えて言った，
「羊は陸産のもののなかで最高ですし，魚は水産のもののなかの筆頭です。好みの違いは

あっても，どちらも珍味と讃えられています。しかし味の点から申せば，はなはだ優劣の差があります。羊は斉や魯のような大国，魚は邾や莒のような小国です。ただ茗となると，酪の奴にするわけにはまいりません」。（中略）
彭城王が粛に言った，「あなたは斉や魯の大国を重んじないで，邾や莒のような小国を愛しておられますな」。粛は答えて言った，「郷里で美味としているものは，どうしても好きになるものです」。彭城王は重ねて言った，「明日どうかお越し下さい。あなたのために邾莒の食事をおもてなししましょう，それに酪奴も用意しますよ」。ここから茗を酪奴とも呼ぶようになった。
その頃，給事中の劉鎬は粛の生活態度を敬慕して，ひたすら茗を飲むことを習っていた。彭城王は劉鎬に言った，「あなたは王侯貴族の八珍の美味を慕わないで，蒼頭どもの水厄を好んでおられる。「海べに臭きを逐う夫あり」とか，「（村里に）西施の顰みにならう（婦人がいる）とかいうのは，あなたの場合がまさにそれですな」と。これは彭城王の家に江南出身の下僕がいたので，それにことよせてからかったのである。これ以後，朝廷の貴顕の宴会に際しては，茶の接待があっても，みな恥として飲まなかった。ただ南朝からはるばる帰順してきた人々だけが好んで飲んだ。
蕭衍の子の西豊侯蕭正徳が帰順したとき，元義は彼のために茶を接待しようと思い，まず，「あなたは水厄はどれくらいいけますか」と尋ねると，正徳は相手のいう意味が分らず，「やつがれは水郷に生まれましたが，身を立ててこのかた，まだ陽侯の難（水難）に会ったことはございませぬ」と答えた。元義とその座に居合わせた客はみなどっと笑った。（入矢 1990: 140-142）[17]

粛初入国，不食羊肉及酪漿，常飯鯽魚羹，渇飲茗汁。京師士子見粛一飲一斗，号為漏巵。経数年已後，粛與高祖殿会，食羊肉酪粥甚多。高祖怪之，謂粛曰，即中国之味也，羊肉何如魚羹。茗飲酪漿何如。粛対曰，羊者是陸産之最，魚者是水族之長。所好不同，並各称珍。以味言之，是有優劣。羊比斉魯大邦，魚比邾莒小国。唯茗不中與酪作奴。（中略）彭城王謂粛曰，卿不重斉魯大邦，而愛邾莒小国。粛対曰，郷曲所美，不得不好。彭城王重謂曰，明日顧我。為卿設邾莒之食，亦有酪奴。因此復号茗飲為酪奴。時給事中劉鎬慕粛之風，專習茗飲。彭城王謂鎬曰，卿不慕王侯八珍，好蒼頭水厄。海上有逐臭之夫，里内有学顰之婦，以卿言之即是也。其彭城王家有呉奴，以此言戯之。自是朝貴讌会，雖設茗飲，皆恥不復食。唯江表殘民遠来降者好之。後蕭衍子西豊候蕭正徳帰降時，元義欲為設茗，先問，卿於水厄多少。正徳不暁義意，答曰，下官生於水郷，而立身已来，未遭陽侯之難。元義與挙坐之客大笑焉。

王粛について前述したが，北朝の代表的な漢人大臣である。彼は北朝に来てしばらくにして，鮮卑族の生活習慣をある程度受けいれるようになった。そのとき，南北の食物を比べる話があった。もちろん王粛は北朝の方を高く評価していたが，ひたすら孝文帝に迎合するのではなかった。茶について「ただ茗は酪の奴隷とするのはあたらない」といっていた。しかし，「唯茗不中與酪作奴」について，正反対の解釈がある。陳舜臣氏と周兆望氏は「ただ茶は酪の奴隷になることさえできません」と解釈しているが，筆者は布目潮渢氏の解釈に同感する（陳 1988: 9; 周 1994: 228; 布目 1995: 104）。

王肅は喫茶を好むこそ，給事中の劉鎬は王肅の風流を敬慕して，ひたすら喫茶を習っていた。

彭城王の元勰は劉鎬の喫茶を嘲ってから，朝廷の貴顕の宴会では相変わらず茶を設けていたが，皆恥として飲まなかった。よって彭城王が劉鎬を嘲る以前には，多くの鮮卑貴族は喫茶していたことがうかがえる。むかし江南から来て留まった人々や最近来た人だけが好んで飲んだ。「江表残民」，「遠来降者」といわれるものは，宮廷宴会に参加する資格がある以上，当然庶民ではなく，江南出身の官僚や南朝の逃亡貴族であるはず，この後の蕭正徳はこのような人物である。この史料は北朝に来た南朝の人々が喫茶の習慣を保っていたことを裏付ける。周兆望氏は，劉鎬らは鮮卑貴族の権威を恐れて，少なくても公の場合に茶を飲まなくなったと述べているが（周 1994: 228），以上の史料によると，劉鎬が茶を飲まなくなる事実は書かれていない。逆に劉鎬は元勰の嘲笑に屈服しない人物であると理解する方が文脈が通る。また，元勰は王肅に茶をもてなす話があり，これについて周兆望氏は彼も南朝の喫茶風習の影響を受けたと指摘している（周 1994: 228）。実際，元勰は王肅を招待したいのではなくて，王肅の喫茶を含む生活習慣を揶揄していただけである。

元勰は喫茶に興味がなかったが，そのことがもし北朝の喫茶風習に対して影響を与えたとしても，一時的にすぎないであろう。当時，北魏の宮廷宴席では相変わらず茶を設けていたし，20余年後の522年，北魏の最高権力層でもまた茶のもてなしを行っていた。

元義は，高貴な出身であり，霊太后の朝政のもとで，太后の妹をめとり，とんとん拍子に出世していった人である[18]。元義の権勢が飛ぶ鳥を落す勢いであったとき，梁の武帝の養子だった蕭正徳が魏に亡命してきた[19]。そして接待のとき，元義は茶で蕭正徳をもてなそうとしたが，そのとき喫茶のことを「水厄」といった。しかし，南朝から来た蕭正徳はその意味が分からなかった。このことに対して，周兆望氏は蕭正徳を無学無能と罵り（周 1994: 228），布目潮渢氏は「水厄は南朝では水によって受ける災難の意味に使われ，北朝人のいう水厄の意味がわからなかった」と分析している（布目 1995: 105）。

元勰や元義が喫茶のあだ名として用いた「水厄」はすでに東晋時代にあった。

> 『世説新語』に，「晋の司徒長史王濛は茶を飲むことを好んで，人が来ればいつも茶を飲ませ，士大夫は皆これに困っている。王濛に挨拶に行くごとに必ず今日水厄があるという」とある。

『世説新語』，晋司徒長史王濛好飲茶，人至輒命飲之，士大夫皆患之。毎欲往候，必云今日有水厄。(『太平御覧』巻867飲食部・茗)

簡文帝のとき，王濛は司徒長史に昇任され，このことは東晋時代の出来事であった。王濛が客を茶でむりやりにもてなしていたことは，同僚にとってはまことに水の災いと感じられ，そのため「水厄」という言葉を使ったと推測される。そして，「水厄」といういい方はすぐに北方に伝わり，喫茶の風習を受け入れたばかりの北魏において使われる機会が多かったと思われる。南朝では喫茶を一般的に行っていたため，「水厄」といういい方は喫茶の代名詞として定着することはなく，南朝の人々は「水厄」の意味が分からなかったのであろう。

『洛陽伽藍記』の史料は北魏における喫茶の風習が消失しなかったことを証明する一方で，喫茶が持つ儀礼的性格，および茶の儀礼の社会生活における重要性もうかがえよう。「酪奴」，「水厄」といいながら，喫茶を受け入れたのが鮮卑貴族の実情であろう。そしてこの段階を経て，唐に入ると，遊牧民族はすっかり喫茶風習を受容し，茶馬貿易も発足した。

5　道士・僧侶・庶民の喫茶

5.1　道士・僧侶の喫茶

道教は喫茶習俗の形成に強い影響を与えた（関 2001)。古代の人々も茶と道教の緊密な関係を感じ，そして西晋には道教の伝説中の人物にかかわる喫茶の物語が生まれていたのである。『茶経』巻下七之事に，次のようにある。

『神異記』に，「余姚の人虞洪が山に入って茗を採み，一人の道士に遭った。その道士は3匹の青牛を牽き，洪をつれて，瀑布山に至っていうには，『私は丹丘子です。あなたはうまく茶を点てられると聞き，いつも茶を恵んでいただくことを願っていました。山のなかには大茗があり，お贈りできます。あなたに頼みたいのですが，柄杓に余った茶があったらいつか下さいますようお願いします』と。そのため虞洪はその人を祭った。後につねに家人を山に入れ，大茗を得た」とある。

『神異記』，餘姚人虞洪入山採茗，遇一道士，牽三青牛，引洪瀑布山，曰，予，丹丘子也。聞子善具飲，常思見恵。山中有大茗，可以相給，祈子他日有甌犧之餘，乞相遺也。因立奠祀。後常令家人入山，獲大茗焉。

『神異記』は散逸したが，その作者は西晋の王浮で，丹丘子は道教の伝説人物である。その物語は現存『神異記』（輯本）に見えないが，西晋時代の人々が茶と道教の

関係をいかに見ていたかということを反映しているのである。

また，道士である陶弘景は丹丘子と茶に関する話を『雑録』に収めている。

> 苦茶は身を軽くし，骨を換える。むかし丹丘子・黄山君がこれを服んだ。（布目・中村 1985: 124）
>
> 苦茶軽身換骨，昔丹丘子，黄山君服之。（『茶経』巻下七之事）

よって丹丘子と茶についての物語は晋代や南北朝にはある程度広まっていたといえる。

南北朝は仏教が大いに発展した時代である。道教の奇談とは異なり，僧侶の喫茶に関する記録は仏教の繁栄に伴って早い時期に現れている。宋の新安王の劉子鸞と豫章王の劉子尚は八公山に曇済道人を訪ねたとき，道人は茶でもてなした。『茶経』巻下七之事に，

> 『宋録』に，「新安王の子鸞と豫章王の子尚が，曇済道人を八公山に詣ねた。道人は，茶茗で接待した。子尚はこれを味わって，『これこそ甘露である。どうして茶茗などといえましょう』と言った」とある。（布目・中村 1985: 122）
>
> 『宋録』，新安王子鸞，豫章王子尚詣曇済道人於八公山。道人設茶茗，子尚味之，曰，此甘露也，何言茶茗。

とある。

八公山は安徽省寿県の東北，淮河の南，東淝河の北にある。曇済道人は河東（現在の山西省）の人である。13才で出家し，導法師の弟子になって，八公山の東寺に住んだ。宋の大明2年（458年）に長江を渡って中興寺に移り住んだ[20]。劉子尚と劉子鸞は孝武帝の第2，第8子である。新安王の子鸞と豫章王の子尚が八公山に詣ねたのは，大明2年より前であり，劉子尚は9才，劉子鸞は3才以前であった[21]。この二人の王子は幼少の頃から茶を飲んでいたことが分かる。

ほぼ同時に法瑤という僧侶も喫茶をしていた。『茶経』巻下七之事に次のように記している。

> 釈道説の『続名僧伝』に，「南朝宋の釈法瑤，姓は楊氏，河東の人である。元嘉中に，揚子江を渡り，沈台真に遇い，武康の小山寺に還ることを請われた。そのとき，法瑤は隠退の年に近く，飲むところの茶を飯の代わりにした。大明中，呉興に勅して，礼遇して首都の建康に上らせた。ときに年七十九歳であった」とある。（布目・中村 1985: 119）
>
> 釈道該説『続名僧伝』，宋釈法瑤，姓楊氏，河東人。永嘉中過江，遇沈台真，請真君武康小

山寺，年垂懸車，飯所飲茶。永明中，勅呉興，礼致上京。年七十九。

僧侶は社会の各階層に広汎な影響力を持っていた。曇済も法瑤も有名な僧侶であり，その影響力はいっそう高まった。彼らが積極的に喫茶を取り入れたことは，喫茶の普及に大いに貢献したといえる。

5.2　商品化される茶

庶民，とくに生産地から外れたところの人々が茶を飲むためには，商業ルートで買うしかない。町で売られる茶の記録は，西晋の初年には文献に見える。傅咸は「司隷教」のなかに，

聞くところによると，南市には四川の老婦人がいて，茶粥を作って売っていた。ところで廉事はその器具を打ち壊し，商売させなくした。市場で餅茶を売っているのに，茶粥を禁止して，老婦人を困らせたのは何故であるか。

聞南市有蜀嫗作茶粥売之，廉事毆其器具，使無為。売餅於市，而禁茶粥，以困老姥，独何焉。（『傅中丞集』）

と記す。傅咸はかつて司隷校尉を兼任したことがある。「司隷教」は彼が司隷校尉の在任中に書いたものであろう。顧栄は傅咸を「傅長虞は司隷となり，気丈・忠誠・勇敢で，人を驚かすほど弾劾した。完璧な人材ではないけれど，一つだけすぐれていることは貴ぶべきである」（傅長虞為司隷，勁直忠果，劾按驚人。雖非周才，偏亮可貴也。『晋書』巻47傅咸伝）と評価している。老婦人のような弱いものの肩を持つことは，彼の清直な性格に非常に合っていた。

東晋の初年には傅咸の書いたことと極めて類似した話がもう一つある。主人公も同じ老婦人であるが，ただ場所は黄河流域から揚子江の下流に移されていた。『茶経』巻下七之事に次のように記している。

『広陵耆老伝』に，「晋の元帝のとき，一人の老婆がいて，毎朝ひとりで器一ぱいの茗をもち，市場に行って売った。市場に来た人は競走して買ったが，朝から夕方になっても，その器のなかは減らなかった。得た銭は路傍の孤児や乞食に与えた。人々はこれを不思議に思った。州の法曹がこの老婆を獄中に繋いだ。真夜中になると，老婆は売っていた茗の器を執って，獄の窓から飛び去った」とある。（布目・中村 1985: 118）

『広陵耆老伝』，晋元帝時，有老姥毎旦独提一器茗，往市鬻之。市人競買，自旦至夕，其器不減。所得銭散路傍孤貧乞人。人或異之。州法曹縶之獄中。至夜，老姥執所鬻茗器，従獄牖中飛出。

東漢時代の広陵郡は現在の江蘇省と安徽省の境目にある洪沢湖と六合県の東，泗陽・宝応・灌南の南，串場河の西，揚子江の北の地区にあたる。東晋以後，管轄区域がだんだん小さくなり，郡都の広陵はすなわち今の揚州にあたる。神仙道教の思想がこの物語の背景となっているであろう。

以上の二つの物語は晋代における茶がすでに商品として南方であるか北方であるかに関係なく市販されていた事実を反映している。消費者は市場で買物する庶民であるから，晋代における庶民階層には喫茶習俗があったことを示している。

5.3　供え物と喫茶

『異苑』巻7のなかで，茶と関係ある物語は次のようである。

> 剡県（現在の浙江省嵊県）の陳務の妻は若くして二人の子供と寡婦暮らしをし，茶茗を飲むのを好んだ。自宅のなかに古い塚があり，毎日茶を飲むときにはまずお供えをしていた。二人の子供はこれを心配して，「古い塚に何が分かるものですか。ただ祭りで苦労させられるだけですよ」といい，塚を掘り起こそうとしたが，母が厳しく禁めたので取り止めた。その夜，母は夢に一人を見ていうには「私はこの塚に二百余年住んでいます。あなたの二人の息子さんはいつも塚を毀そうとされますが，あなたのお陰で保護され，またよい茗も供えてくださいます。土に埋もれて朽ちはてた骨ではありますが，むかし翳桑で餓えていた霊輒が助けてくれた趙盾の命を助けたように，ご恩返しを忘れましょうや」と言ったところで，ついに目が覚めた。翌朝起きると，庭に十万銭を獲，永く埋めてあったもののようだが，ただ千銭ずつの貫しひもは新しかった。母はこの銭を提げて帰って子供に告げ，二人は恥じた。これより母は以前にもましてお祈りとお供えをした。（布目・中村 1985: 117）
>
> 剡縣陳務妻少與二子寡居，好飲茶茗。宅中先有古塚，毎日作茗飲先輒祀之。二子患之，曰，古塚何知，徒以労祀。欲掘去之，母苦禁而止。其夜母夢一人曰，吾止此塚二百餘年，謬蒙恵沢。卿二子恒欲見毀，賴相保護，又饗吾佳茗，雖泉壌朽骨，豈忘翳桑之報。遂覚。明日晨興，乃於庭内獲銭十萬，似久埋者，而貫皆新。提還告其兒，兒并有慙色。従是禱酹愈至。

『異苑』は劉敬叔に書かれた志怪小説であり，著者のことは詳しくは分からないが，4世紀末，5世紀初の人である。ここも茶が供え物とされていたが，前述した斉の武帝の茶を供え物とする遺詔より約1世紀早かった。供え物には日常の飲食品が多かったが，茶を供え物とすることから喫茶が飲食生活に定着していたことがうかがえる。

6　結　　論

魏晋南北朝時代を喫茶の前史として考える人は少なくないが，近年，個別的な事象

が取り上げられて，同時代の茶文化の研究はようやくはじまったところである。

本稿では同時代の史料を再検討した上で，まずこれまでの先行研究のなかで取り上げられなかった「魏晋風流」の視点から喫茶の文化史上のあり方について検討した。西晋の後半，社会に影響力を持つ風流人は積極的に喫茶を取り入れ，喫茶を風流として成立させた。少し遅れて，贅沢な社会風習への反動も一つの原因だと思われるが，茶の「倹」の精神が成立する。北朝では王粛の影響を受けて，鮮卑人の劉縞さえ茶の風流に魅了された。遊牧民族の中原進出は北方における喫茶風習の普及に一時的にマイナスの影響を与えたと思われるが，北魏の安定した政権ができて，漢化政策の遂行に伴い，北方の喫茶風習は復活していったとみてよい。喫茶風習は上層社会に定着していたと同時に，庶民の社会にも広がっていた。喫茶を外来文化として受け入れた日本やイギリスでは，喫茶風習が上層社会から庶民社会へと展開したことが明白であるが，喫茶風習の起源地である中国では喫茶風習の広がりはこのような単純なものではなかった。最初は日常的とはいえないものの，庶民の宗教的飲料あるいは健康飲料であって，魏晋南北朝時代にようやく上層社会に定着し，貴族や士大夫文化としてさらに発展してゆく。供え物としての茶の使い方も庶民からはじまり，皇帝に受け入れられたことをきっかけとして制度化された。その後，宋代の朱熹によって供え物の茶が『家礼』に取り入れられ，中国，さらに東アジアの供え物として成立していった。唐宋時代への喫茶文化の展開は本論で言及できなかったが，それについては今後の課題としたい。

謝　　辞

本稿は，学位論文の一部を大幅に加筆修正したものである。論文指導教授は立命館大学中村喬先生であり，国立民族学博物館の熊倉功夫教授と塚田誠之教授からも大変貴重な御指導を賜った。この研究はトヨタ財団研究助成を受けて行った。記して謝意を申し上げたい。御指導にもかかわらず，不備の点も残るが，そのすべての責任は著者にある。

注

1）茗粥あるいは茶粥とは煮点てた茶のことである。『茶寮記』「茗古不聞食，晋宋已降，呉人採葉煮之，曰茶粥。」
2）中村喬氏は『爾雅』の郭璞注から「羹として用いたものの方がより原初的な茶の用法であった」と論じている（中村 1984: 2）。
3）張沢咸氏の「漢唐時代的茶葉」も魏晋南北朝を取り扱っているが，唐代以前の茶についてはほんの一筆触れているのみである。
4）風流の思想は日常生活に波及していたのだが，その風流が喫茶に与えた影響を探る。ま

た，ここでは魏晋南北朝の社会構成を分析することは目的ではないが，社会各階層の喫茶状況を論述する際，史料の構成と論述の便のために，政治的地位を基準とし，皇帝と皇族を含む「宮廷」，朝廷に在任する「官僚」，官職のない「庶民」，宗教界人士の「僧道」という4つの階層に分けて，各々の階層の喫茶状況を分析する。各階層の喫茶状況を分析することから，喫茶がいったいどのくらい普及したかが知られよう。またそれは茶文化の発展レベルを評価する基準ともなる。魏晋南北朝における階級の構造に関する研究は朱大渭（1998）を参照。

5）　中国語論文は引用者が和訳した。以下同様。

6）「風流」という言葉には多くの意味がある。その中の1つは「不正当的な男女関係」である。『開元天宝遺事』巻上風流藪沢に，「長安有平康坊，妓女所居之地。京都俠少，萃集於此，兼毎歳新進士以紅箋名紙游謁其中，時人謂此坊為風流藪沢」とあり，妓女の居る所を「風流藪沢」と呼んだ。ここでもともと風流の語意と一致していた高雅・儒雅・風雅などの言葉が対義語になってしまった。現代中国語では，「風流」という言葉は貶める意味で一般的に使われ，「喫茶は風流である」という表現は失われている。これは喫茶の風流に関する研究が全くされなかった原因の1つと考えられる。

7）　楊朱は戦国時代の思想家で，人間の本性はただ色食の欲であり，自己のこの欲を満足させることこそ自然に随順なる説を唱えた。異端として孟子に排斥された。

8）　魏晋時代には老子の無名･自然の学説が尊ばれ，これに対して名分，人倫の儒学を名教という。

9）『晋書』巻79謝安伝を参照。

10）　呉覚農氏と布目潮渢氏との「倹」についての見解は相違している。『茶経』巻上一之源にある「倹」について，呉氏は「茶之為用，味至寒，為飲最宜。精行倹徳之人，若熱渇，凝悶，脳疼，目渋，四肢煩，百節不舒，聊四五啜，與醍醐甘露抗衡也」と読み，布目氏は「茶之為用，味至寒，為飲最宜精行倹徳之人」と読み，「茶の効用は，味が至って寒であるから，行ない精れ倹の徳のある人の飲むのにもっともふさわしい」と訳している。筆者は，布目氏に同意する。呉氏は「精行倹徳之人」に対して「封建士大夫階級の思想を反映するもの」と批判的な態度をとっているが（呉 1987: 41），それは「階級闘争」の歴史観の産物であろう。『茶経』巻下五之煮に「茶性倹，不宜広，則其味黯澹。且如一満碗，啜半而味寡，況其広乎」とある。この2ヶ所の「倹」について，布目氏は「倹とは，つづまやかな控えめな徳である。陸羽は，茶をたんなる飲料としてではなく，修養にも効果のあるものとした。陸羽茶道の精神は，この倹一語につきる。倹は『易経』否の卦に，「君子は倹徳を以て難を避け，栄ゆるに禄を以てすべからず」とあり，花やかさとは対照的な徳で，味としても，すぐ感じる強い味ではなく，よく味わってはじめて感得できるもので，隠者にふさわしい飲料で，とくに酒とは対立的なものと解すべきであろう」と認識している（布目・中村 1985: 44）。「倹」の反対概念としての「広」について，布目氏は「ここでは多人数のことも含まれていることに留意すべきであろう」と指摘している（布目・中村 1985: 87）。呉氏は「倹」を「湯に溶ける茶の成分が少ない」と解き，「広」を「茶に加える湯が多い」と解釈している（呉 1987: 165）。布目氏は茶の味など物的な繋がりを認めても，精神性を強調する傾向が明確である。それは日本茶道の影響であろう。物質性と精神性のどちらに傾くかは中国と日本における茶文化研究の特色ともいえるのではないか。ただしここでは茶の点て方を論述しているため，呉氏の解釈は原意に近いではないかと思われる。ただしさらに明言するためには唐代における茶の点て方の解明が前提となる。

11）「茶酒論」の著作時代については，那波利貞（1958），小笠原宣秀（1967）を参照。

12）　王敷「茶酒論」「酒為茶曰，三文一錁，何年得富。酒通貴人，公卿所慕。曾遣趙主彈琴，秦王撃缶。不可把茶請歌，不可為茶交舞。茶喫只是腰疼，多喫令人患肚。一日打却十盃，腹脹又同衙鼓。若也服之三年，養蝦蟆得水病報。茶為酒曰，我三十成名，束帯巾櫛。驀海騎江，來朝今室。将到市，安排未畢。人來買之，銭財盈溢。言下便得富饒，不在明朝後日。阿你酒能昏乱，喫了多饒啾唧。街中羅織平人，脊上少須十七。酒為茶曰，豈不見古人才子，吟詩盡道，渇來一盞，能生養命。又道，酒是消愁薬。又道，酒能養賢。古人糟粕，今乃流伝。茶賤三文五碗，酒賤中半七文。致酒謝坐，礼讓周旋。国家音楽，本為酒泉。終朝喫茶水，敢動些些管弦。茶為酒曰，阿你不見道，男兒十四五，莫與酒家親。君不見猩猩鳥，為酒喪其身。阿你即道，茶喫発病，酒喫養賢。即見道有酒黄酒病，不見道有茶瘋茶顛。阿闍世王為酒殺父害母，劉零為酒一死三年。喫了張眉竪眼，怒鬥宣拳。状上只言麤豪酒醉，不曾有茶醉相

言。不免求首杖子，本典索銭。大伽搕項，背上抛椽。便即焼香断酒，念佛求天。終身不喫，望免迍邅。」（『敦煌宝藏』123，伯2718号）

13）『晋書』巻55張載伝を参照。

14）「黒子」について，布目氏はさかなと訳している。『斉民要術』巻4種椒に「熟時収取黒子。俗名椒目，不用人手数近捉之則不生也」とあり，また，「按今青州有蜀椒種，本商人居椒為業，見椒中黒実，乃遂生意種之。凡種数千枚，止有一根生。数歳之後，便結子実，芬芳，香，形，色与蜀椒不殊，気勢微弱耳」とある。あまりにも珍しくて，さらに栽培しにくいため，この黒い山椒の貴重さがいっそう増した。よって張載はこの黒い山椒が龍のしおからよりすぐれると評価した。六清について，『周礼』巻4天官・膳夫に「膳用六牲，飲用六清」とあり，水・漿・醴・醐・醫・酏の6種類の飲料の総称である。

15）『梁書』巻33劉孝綽伝に，「太子起楽賢堂，乃使画工先図孝綽焉。太子文章繁富，群才咸欲撰録，太子独使孝綽集而序之」とある。

16）版本の違いかもしれないが，従来の研究者は『茶経』にあるこの資料を『搜神記』で確認することができなかった。『搜神記』には8巻本と20巻本があり，いずれも明代刊行本に基づくが，8巻本は干宝の原作ではなく，唐代以後の作品とされ，20巻本は後人の手が入ってはいるものの，原書の姿を伝えているという。8巻本にはこの物語がないが，筆者の使っているのは清代の張海鵬が編集した20巻本の「学津討原」本である。

17）元乂はまた元義や元叉ともする。

18）『魏書』巻16京兆王伝「神亀（518−519年）末，子叉得志，転司徒公，仍加侍中。継以蕃王，宿宦旧貴，高祖時歴内外顯任，意遇已隆。霊太后臨朝，入居心膂，兼処門下，歴転台司，叉又居權重，栄赫一世。」

19）『魏書』巻59蕭正表伝「正光三年（522年），（蕭正徳）背（蕭）衍奔洛（現在の河南省洛陽），朝廷以其才庸劣，不加礼待。尋逃帰，衍不之罪。」

20）『三論祖師伝集』巻下「曇済，河東人，十三出家，為導法師弟子住八公山東寺。（中略）以宋大明二年過江住中興寺」。

21）『宋書』巻80孝武十四王伝による推算。

文　　献（漢籍および翻訳書）

『異苑』10巻，劉宋・劉敬叔撰，学津討原本，百部叢書集成所収，芸文印書館，台北，1964-1970年。
『雲谷雑記』4巻，宋・張淏撰，武英殿聚珍版叢書本，百部叢書集成所収。
『開元天宝遺事』2巻，後周・王仁裕撰，陽山顧氏文房本，百部叢書集成所収。
『漢書』100巻，漢・班固撰，縮印百衲本二十四史，商務印書館，上海，1958年。
『魏書』114巻，北斉・魏収撰，縮印百衲本二十四史。
『玉台新詠』10巻，陳・徐陵輯，四部叢刊本，台湾商務印書館，台北，1979年。和文引用は，石川忠久訳『玉台新詠』（中国の古典25），東京：学習研究社，1986年。
『嵇中散集』10巻，魏・嵇康撰，四部叢刊本。
『呉興記』1巻，劉宋・山謙之，范声山雑著本，富晋書社，北京，1931年。
『高僧伝』13巻，梁・慧皎撰，海山仙館叢書本，百部叢書集成所収。
『三国志』65巻，晋・陳寿撰，縮印百衲本二十四史。和文引用は，小南一郎訳『正史三国志 8』東京：筑摩書房，1993年。
『三論祖師伝集』3巻，（建仁4年・伝覚隆撰），大日本仏教全書第111冊伝記叢書，仏書刊行会，東京，1979年。
『資治通鑑』294巻，宋・司馬光撰，四部叢刊本。
『周易正義』10巻，南昌府学重刊宋本十三経注疏，芸文印書館，台北，1981年。
『周礼注疏』42巻，南昌府学重刊宋本十三経注疏。
『集古録跋尾』10巻，宋・欧陽修撰，朱氏槐廬校刊本，石刻史料新編所収，新文豊出版公司，台北，1977年。
『晋書』130巻，唐・太宗他撰，縮印百衲本二十四史。
『隋書』85巻，唐・魏徵他撰，縮印百衲本二十四史。
『世説新語』3巻，劉宋・劉義慶撰，四部叢刊本。和文引用は，森三樹三郎訳『世説新語』（中国

古典文学大系第9巻），東京：平凡社，1979年。
『斉民要術』10巻，北魏・賈思勰撰，学津討原本，百部叢書集成所収。
『膳夫経』1巻，唐・楊華撰，碧琳琅館叢書本，篠田統・田中静一編『中国食経叢書』所収，書籍文物流通会，東京，1972年。
『全三国文』75巻，清・厳可均校輯，全上古三代秦漢三国六朝文所収，中文出版社，京都，1981年。
『全晋詩』8巻，民国・丁福保編纂，全漢三国晋南北朝詩，芸文印書館，台北，1983年。
『全唐文』1000巻，清・董誥他編，内府刊本，中華書局，北京，1983年。
『宋書』100巻，梁・沈約撰，縮印百衲本二十四史。
『捜神後記』10巻，晋・陶潜撰，学津討原本，百部叢書集成所収。
『捜神記』20巻，晋・干宝撰，学津討原本，百部叢書集成所収。
『太平御覧』1000巻，宋・李昉他撰，四部叢刊三編本，上海書店，上海，1985年。
『茶経』3巻，唐・陸羽撰，百川学海本，百部叢書集成所収。和文引用は，布目潮渢・中村喬訳注『中国の茶書』（東洋文庫289）東京：平凡社，1985年。
『茶寮記』1巻，明・陸樹声撰，夷門広牘本，百部叢書集成所収。
『敦煌宝藏』，黄永武他編，新文豊出版社，台北，1982-1986年。
『南斉書』59巻，梁・蕭子顕撰，縮印百衲本二十四史。
『南史』80巻，唐・李延寿撰，縮印百衲本二十四史。
『傅中丞集』1巻，晋・傅咸撰，漢魏六朝百三名家集，章氏経済堂刊本，湖南古書流通処，長沙，1924年。
『法書要録』10巻，唐・張彦遠輯，学津討原本，百部叢書集成所収。
『北史』100巻，唐・李延寿撰，縮印百衲本二十四史。
『本草衍義』20巻，宋・寇宗奭撰，十萬卷楼叢書本，百部叢書集成所収。
『洛陽伽藍記』5巻，北魏・楊衒之撰，増訂漢魏叢書本，大化書局，台北，1983年。和文引用は，入矢義高訳注『洛陽伽藍記』（東洋文庫517），東京：平凡社，1990年。
『六臣注文選』60巻，梁・蕭統輯，四部叢刊本。

文　　献（論考）

青木正児
　1962　『中華茶書』東京：春秋社。
陳舜臣
　1988　『茶事遍路』東京：朝日新聞社。
陳椽
　1984　『茶業通史』北京：農業出版社。
張沢咸
　1981　「漢唐時代的茶葉」『文史』11: 61-79，北京：中華書局。
袁行霈
　1991　「陶淵明與魏晋風流」国立成功大学中文系編『魏晋南北朝文学と思想学術研討会論文集』pp.572-573，台北：文史哲出版社。
呉覚農
　1987　『茶経述評』北京：農業出版社。
関剣平
　1997　「中国茶宴文化史研究──草創期」『助成研究の報告7』pp.13-18，東京：味の素食の文化センター。
　1999　「『猶賦』から見る魏晋南北朝の喫茶」『立命館史学』20: 33-35。
　2001　「茶：薬から嗜好品への道──技術史・医薬史の研究から見た喫茶の起源・道教の影響」『アジア・アフリカ言語文化研究』62: 201-237。
中村喬
　1977　「荼蘇考贅説」『立命館文学』386-390(1-5): 327-348。
　1984　「茶贅言──中国の茶における食葉法と雑和法」『立命館文学』463-465(1-3): 1-22。

那波利貞
　1958 「唐の郷貢進士王敷の茶酒論の研究」『甲南大学文学会論集』8: 1-62。
布目潮渢
　1995 『中国喫茶文化史』（同時代ライブラリー 224）東京：岩波書店。
小笠原宣秀
　1967 「敦煌本『茶酒論』について」『末永先生古稀記念古代学論叢』pp.217-229，吹田：末永先生古稀記念会。
欧陽小桃
　1991 「魏晋南北朝人士飲茶述略」『農業考古』24(2): 201-202。
佐藤正光
　1997 『南朝の門閥貴族と文学』東京：汲古書院。
孫立
　1996 「魏晋南北朝飲茶與飲酒之風」『蘇州大学学報』94(1): 104-106。
周兆望
　1994 「略論魏晋南北朝飲茶風気的形成和転盛」『農業考古』27(2): 226-228。
朱大渭
　1998 「魏晋南北朝階級結構試析」朱大渭『六朝史論』pp.102-140，北京：中華書局。
朱自振・沈漢
　1995 『中国茶酒文化史』（中国文化史叢書32）台北：文津出版社。
上山春平編
　1977 『照葉樹林文化』（中公新書201）東京：中央公論社。
矢野仁一
　1916 「茶の歴史に就て」『続史的研究』pp.191-322，東京：史学研究会。